

父が亡くなってからの自分の生活

ポウン ソピア-キムレン

確かに、世の中の親にとって、子供ほど大切な物はないでしょう。子供にとっても親は自分の幸せでしょう。そのため、親子の繋がりは硬い石のような物だと思われています。つまり、その繋がりは切り裂くことができないわけです。

だが、私にはその様な悲劇に遭ってしまいました。それは4年前に父が亡くなったことです。父は亡くなってから、4年が過ぎて、様々な事が理解できるようになりました。

まず、父が亡くなったばかりの時、自分は父の強さ明確に分かりました。父は常に家族のために、朝から夜遅くにおいて、仕事をしており、残業もしていました。本当に有難いことです。そして、私は以前よりろ倍頑張って、母の頼りになりました。

さらに、自分はもう家族に迷惑をかけない良い息子になりました。以前は毎日午前10時

ソピア キムリン ②

王立ブノンベン大学外国語学部日本語学科3年生 作文4

に起きた私ようやく7時に目を覚ませるようになりしました。そして、家族のためであれば、私は息子として命を失っても、怖くない。

次に、自分はもうあの時から子供ではない事が分かってきました。私達は以前5人家族で、両親と兄弟と私でした。父が亡くなり、4人になり、私達は自分達の役目が分かって、子供のようにするのがもうしなくなりました。一人一人は目標を立てて、常に勉強して、今までの年間が過ぎて、良い学習者になってきました。

最後に、私は金の大切さが理解できるようになったと言えるでしょう。なぜかということ、父がいないと、父の収入を得られないので、本当の金の価値が理解し、浪費しないように注意できるようになってきました。

その影響で、自分は様々な体験から学び、強い人間になってきました。その時から常に何かをする時、まず、頭を使って、行動しています。良い大人になるのにつれて、さらに

人々の頼りになれるようになりたいです。それから、自分の国の力もなりたいです。なぜかというと、父が自分の最後の遺言でこう私に言ったからです。「俺がお前達の良い大人になる姿まで見送らなくて、すまなかった。そして、俺がいなくても、悲しまないで、勉強を頑張って、国の頼る力になってほしい。また、国が先進国になったら、俺の写真の前で、忘れないで、伝えてほしい」と言われていました。

そのため、私は未来のため、頑張ります。